



へき地保育所の受容的保育環境に関する発達臨床心理学的アプローチ：

「気になる子ども達」に対する保育者の保育姿勢の分析を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学へき地教育研究センター 公開日: 2010-03-21 キーワード: 作成者: 後藤, 広太郎, 高久, 宏一, 後藤, 守 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00009838

へき地保育所の受容的保育環境に関する 発達臨床心理学的アプローチ

— 「気になる子ども達」に対する保育者の保育姿勢の分析を通して —

後藤 広太郎 高久 宏一 後藤 守

(北海道大学大学院教育学研究科) (北海道教育大学教育実践総合センター) (北海道教育大学大学院学校臨床心理専攻)

A study on Children with Special Needs of Day Nurseries in Rural Area

Kohtaroh GOTOH, Hirokazu TAKAKU and Mamoru GOTOH

I. 問題の所在

本研究は「保育にあたって気になる子どもたち」を取り巻く保育環境の様相を明らかにし、これらの子ども達の発達支援のあり方を探ることを目的としている。今回の研究では、この手がかりをへき地保育所の保育の世界を通して明らかにしようとしている。

以下に、個別的配慮を必要とする子どもたちを取り巻く保育環境に関する先行研究の考察を通して、本研究における問題の所在を明らかにしていくことにする。

北海道における障害のある子どもたちの保育の実態については後藤らの研究の中にその動向を見ることが出来る。それらの研究は1973年に実施された北海道社会福祉協議会の調査研究を受けて、それ以降5年ごとにその動向を追跡している「障害児保育に関する研究プロジェクト(研究代表者:後藤 守・北海道教育大学)」の中に位置づけられている(北海道社会福祉協議会:1976, 後藤他:1979, 1981, 1985(a), 1985(b), 1985(c), 1990, 小笠原他:1991, 後藤他:1991(a), 1991(b), 小笠原他:1993, 後藤(恵)他:1995(a), 後藤:1995(b), 後藤(恵):1995(c) 1995(d), 後藤他:1995(e), 1996, 1998(a), 金澤他:1998(b), 高久他:1999, 後藤他:2001, 後藤(広)他:2004)

北海道へき地保育所の障害のある子どもたちの保育の動向は時間的推移の中で、郡部保育所を対象にして地域的特性を明らかにした後藤恵美子らの調査研究(北教大僻地教育研究第49号, 1995)に見ることが出来る。これを見ると、へき地保育所を含む北海道郡部の保育所の保育の動向がわかる。この論文では、5年間の時間間隔を設定し保育の動向を見ている。本研究ではこれらの結果の掘

りさげを通して、へき地保育所が今後、直面する課題とへき地保育所に求められている保育環境の課題を提示していくことにする。

後藤らの一連の調査研究によれば、障害のある子どもの受け入れ数は116名(1988年度)から157名(1993年度)と5年間で1.35倍に増加している。比較対象とされた北海道中核都市部S市の1.86倍(77名→143名)と比べて顕著な倍率ではないがその増加率は特徴的な傾向のひとつと見ることが出来る。障害のある子どもの内訳を見ると、精神遅滞の幼児が最も多く、全体の44.8%(1988)~33.8%(1993)の範囲にあり、次いで、言語障害(16.9%~19.1%)、情緒障害(16.4%~18.4%)が一貫して、高い割合にある。この3つの障害によって、全体の78.1%(1988)~71.3%(1993)が占められている。この傾向は都市部のデータと比較すると、精神遅滞の割合(都市部63.6%~50.3%に対して郡部44.8%~33.8%)が都市部において、高いという反面、個別的支援を要求される、情緒障害(都市部6.5%~4.2%に対して郡部16.4%~18.4%)、肢体不自由(都市部1.3%~6.3%に対して郡部12.1%~8.3%)においてはその割合が郡部のほうが、はるかに高い割合になっているところに特徴的傾向が認められる。都市部保育所と異なり、地域的制約から郡部保育所は他に代わりうる発達支援機関がないという状況に加えて、地域の唯一の保育施設としての役割が課されていることがこの資料の背景にあることが強く推測される。このことは、障害のある子どもの受け入れの動機に関する調査項目において、「地域に障害のある子どもを受け入れる施設がなかったため受け入れた」の項目が郡部保育所群38.3%(1988年調査)に対して、都市部保育所群8.8%と極端に低く、群差が29.5%と圧倒的にこの

項目に関して、郡部保育所群の回答の割合が高いことから指摘される。この傾向は5年後の1993年度調査においても、同様の傾向にあり、群差が20.5%と郡部保育所群のほうがこの項目に対して高い割合になっており、一時的な状況でないことが裏付けられている。このことから、「かかわり行動面や身体的活動面」において、個別の保育支援を必要とする子どもたちと郡部の保育所の保育者が日常的に出会う場面が多く、これらの子どもたちに対する発達支援を強く求められていることが示唆される。同時にまた、このことから、これらの子どもたちに対する「カウンセリングマインド」を内包した保育者の保育姿勢が都市部保育所の保育者以上に求められる状況にあると見てよいであろう。

これらの調査結果から、療育機関が限定的なへき地保育所の設置地域においては「へき地保育所の発達支援の取組」がより強く要求されていると見ることができる。さらに、このことは、別な見方をすれば、へき地保育所は「特別なニーズを持つ子どもたちに対する保育支援の力量」が求められていることを意味している。この保育支援の力量には「これらの子ども達を持つ課題に直接にかかわる保育支援力」と「保育支援活動が活性化するための環境を作り出す保育支援関係力」の2つの力量が内包されていると見ることができる。本研究の第1の課題は調査資料の分析を通してこのことを明らかにすることにある。

本研究の第2の課題は保育環境の主たる構成者である「保育者のかかわりの特性」をエゴグラム・パターンの枠組を通して明らかにし、「保育にあたって気になる子どもを取り巻く受容的保育環境の主たる形成者」としての「へき地保育所の保育者のかかわりの特性」を明らかにすることにある。この特性は、保育者の持つ「保育支援関係力」ともいえるもので、園全体の「保育支援の風土」を形成する保育者のエネルギーといってもよい。

このことにかかわって、われわれはこれまでの研究の中で、保育所の園長を対象にして、「保育担当者に求められるもの」に関する調査を進めている。そこでは、「人柄がよく、子どもがすきな者」、「理論より体を使って子どもと動き回ることができる者」、「母親の相談をよく受けとめる力のある者」の割合が高い傾向にあることが指摘されている。これらの特性はこれからの保育者に求められる資質として都市部・郡部の保育所の園長が描いている保育者像と見てよいであろう（後藤他：1998(a)）。これらの保育者像に関する知見はさらに、へき地保育所と都市部の保育所の保育者を対象に、保育者の子どものイメージに関するKJ法による分析と交流分析をベースとしたエゴグラム・パターンの分析を通して、これからの保育で求められる保育者の世界を明らかにしている

（金澤他：1998(b)、高久他：1999、後藤他：2001）。

エゴグラム・パターンは、親 (Parent)、大人 (Adult)、子ども (Child) の3つの自我状態に分けられ、これはさらに5つの類型 (CP, NP, A, FC, AC) に分けられるとしている（東大心療内科研究グループ：1995）。われわれの調査研究の結果では、都市部保育所群・へき地保育所群の保育者は共に、これからの保育に求められる保育者像として、台形型bの、いわゆる、NP (Nurturing Parent) 尺度とA (Adult) 尺度の割合が高い行動パターンをもつ保育者の姿を描いていることが明らかにされている。NP尺度はCP尺度と共に、親の自我状態示しているもので、CP (男性性・父親性) と対照的に女性性 (母親性) の行動特性を内包しているといわれている。また、A尺度は大人の自我状態を示す尺度項目から構成されている。

それでは「保育にあたって気になる子ども」を担当する保育者の世界から見た「これからの保育に求められる保育者像」はどのようなものであろうか。このことにかかわって、われわれは今回の研究に先立って、都市部の幼稚園を対象にした調査結果を分析している（後藤他：2004）。それによれば、「気になる子ども」を担当している保育者の回答では父親的特性を内包したCP特性は極めて低く抑えられていること、FC (自由な子ども) 特性やAC (従順な子ども) 特性は傾向が明確でないのに対して、FCとA (おとな) の特性が極めて高い割合担っていることが指摘されている。これらの研究の流れを受けて、本研究では「気になる子ども」を担当している、へき地保育所の保育者を対象に「これからの保育に求められる保育者像」の特徴を考察することによって、へき地保育所における「気になる子どもたち」を取り巻く大きな要因である保育者のもつ特性を明らかにしていきたい。これが第2の研究課題である。

Ⅱ. 方 法

(1) 調査研究の構成および調査期日

本研究では「気になる子ども」を取り巻く保育環境を明らかにする意図から、北海道内のすべての「へき地保育所」389施設（閉所して返送されてきた分は除く）を対象に調査票を送付し、「気になる子ども」を担当している保育者から回答を求めた。調査期日は2004年3月である。

(2) 調査票の構成及び回答の様式

調査票は2つの記入様式から設問が設定されている。第1面は保育者全員が記入できる様式になっており、第2面は「保育にあたって気になる子ども」がいると回答

した保育者に回答を求める様式になっている。設問項目の具体的内容については結果と考察の中で触れることにする。

第1面の設問項目は以下の通りである。

- ① あなた（回答者）のプロフィールについて
- ② これからの保育の場で求められる保育担当者のイメージについて
- ③ 保育の場および保育体制について
- ④ これからの保育所・幼稚園の保育，および小学校以降の教育のあり方について
- ⑤ 「保育にあたって気になる子ども」の有無について

第2面の設問項目は以下の通りである。

- ① 「気になる子ども」の入園当初の様子について
- ② 「気になる子ども」の保育の方法について
- ③ 「気になる子ども」がいることによる周りの子どもたちへの影響について
- ④ みんなと一緒の保育の「気になる子ども」への影響について
- ⑤ 「気になる子ども」を担当して感じていることについて

(3) 分析対象および方法

本研究では「へき地保育所」の保育者からの回答のうち「保育にあたって気になる子ども」がいると回答した保育者70名を対象にした。本研究ではこれら70名の保育者の回答資料を分析し、分析結果は図示してその特徴を明らかにすることとした。

Ⅲ. 結果と考察

(1) 「保育にあたって気になる子ども」の特徴

図1は「保育にあたって気になる子ども」の入園当初の様子について9つの行動カテゴリーをあらかじめ設定

し、回答を求めたものである。ここでは、それぞれの行動カテゴリーを「かなりある」「ややある」「問題なし」「無回答」の4つの回答パターンに整理して、図示している。

これを見ると、項目8、項目4、項目5、項目9に保育者が捉える「気になる子ども」の特徴が表れている。これに対して、項目7（運動機能面の遅れ）、項目6（他児に乱暴）は相対的に見て低い割合になっている。高い割合を見せている項目8は「注意が持続せず、動きが多い」という内容であるが、この項目内容の行動傾向が「かなりある」と回答した保育者が41.4%に達している。「ややある」という回答38.5%を加えると、79.9%とかなり高い割合にあり、保育者の捉える「気になる子ども」の主要な行動特徴のひとつと見ることができる。次いで高い割合を示している項目4は「特定のものに興味を持ったり、あるいは嫌がったりする」という内容のものであるが、「気になる子ども」にはこのような行動傾向があることが指摘されている。この項目に対する、保育者の回答は「かなりある（38.6%）」「ややある（28.6%）」という内訳になっており、「気になる子ども」の67.2%にこのような内容の行動傾向があると保育者は見ていると考えられる。項目8、項目4の内容は、ADHD（注意欠陥多動性障害）や自閉性発達障害の特性と相通ずる項目内容であり、「気になる子ども」の特徴の一端を示しているように思われる。項目5「指示されなければ動けない（31.4%+45.7%）」、項目9「かんしゃくを起こしやすい（31.4%+37.1%）」は、いずれも高い割合を示している。項目5は自ら行動を起こすことに困難さをもっており、後者は他者の手を借りて要求を実現することに困難さを持っており、結果的に「かんしゃく」という形で情動的バランスの崩れを表出するところに課題を持っている。これらの項目内容はいずれも、保育者を中心とした他者との「要求の実現のために適切な折り合わせができない」ところに困難さを持っており、保育者と適切なマッチングが困難な子どもの行動の様子的一端を

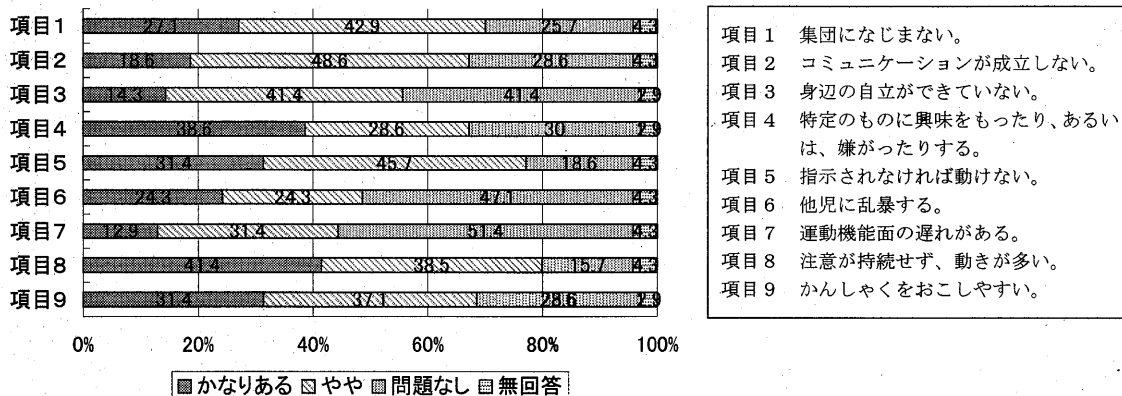


図1 「気になる子ども」の入所・入園当初の様子

これらの「気になる子ども」に見ることができる。

以上述べた調査項目の結果から「気になる子ども」の特徴を見てみると、活動の流れに同期させる注意の持続の困難さと活動の流れに沿った行動の調整の困難さがこれらの子どもたちの抱えている「保育活動場面における課題」であると保育者は見ていることがわかる。保育場面における注意の持続性と行動の調整性の不十分さは、「行動の拡散性」と「集団への不適応性」の問題として行動化されているように思われる。このことが、設問項目1「集団になじまない(27.1%+42.9%)」、設問項目2「コミュニケーションが成立しない(18.6%+48.6%)」などの項目の割合の高さとなって保育場面に現われているように考えられる。このように見てくると、保育者が捉える「保育にあたって気になる子ども」は「周りの人や物とのかかわりをうまくできない子ども」と見ることができる。別な表現をすれば、「保育にあたって気になる子ども」は「まわりの人(保育者やクラスの子どもたち)の手を通して自分の要求を満たす仕方が上手にできない子ども」といってよいように思われる。

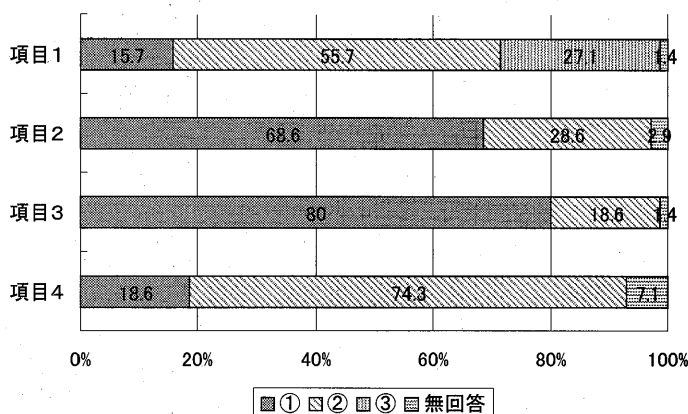
(2) 「保育にあたって気になる子ども」を取り巻く保育の場と保育体制

図2は「気になる子ども」を取り巻く保育の場と保育体制について4つの側面から分析した結果を図示したものである。この保育の場と保育体制はひとり、「気になる子ども」に対する保育形態の設定というよりも、へき地保育所が採用している保育形態と見てよいであろう。この分析資料は「気になる子ども」がどのような保育の場や保育体制の中で保育活動に参画しているかを見る上で重要である。

項目1は保育形態を軸に保育集団の構成を見たもので

ある。項目1は縦割り保育(年齢のさまざまな子ども集団から構成)と横割り保育(同年齢の子ども集団で構成)の2つの保育形態の割合を見たものである。縦割り保育形態15.7%、横割り保育形態55.7%となっており、横割り保育形態の採用が大半を占めているが、特徴的なことは縦割り保育と横割り保育の2つの保育形態を併用している保育所が27.1%にも達していることである。異年齢の子ども達との出会いは、自分より年少の子どもとの出会いにしても、あるいは自分より年長の子どもとの出会いにしても、そのかわり自体の持つ意味は大きいように思われる。多様なかわり体験を「気になる子どもたち」ができるという点で、この複合型の保育形態は注目に値する。さらにまた、異年齢の子どもと接することによって、保育者の個々の子どもに対する見方と接し方に幅ができることが考えられる。この複合型の保育(27.1%)と縦割り保育(15.7%)によって全体の42.8%が占められており、へき地保育所の特徴のひとつとして注目される。

項目2は保育の場に関するものであるが、「それぞれの保育室での活動を重視して保育活動を進めている」の回答が68.6%を占めており、「コーナーを設定するなどして、園全体を活動の場として保育活動をしている(28.6%)」をはるかにうわまわっている。このことと関連して、項目3の保育体制を見ると、「特定の担任がクラスを担当」の割合が80.0%に達している。「保育室での活動重視型」優位の状況は一般的に保育所でとられる保育形態で特別なものではないが「拡散的行動」になりがちな「気になる子ども」の行動リズムを整える点で必ずしも不適切な場の設定とは一概に考えられない。しかし、「気になる子ども」の側に立てば、自由度の高い場の中で「気になる子ども」の行動にまとまりをもたせ



- 項目1 ①縦割り保育で日常の保育活動を進めている。
 ②横割り保育で日常の保育活動を進めている。
 ③縦割り保育と横割り保育の2つの保育形態を併用している。
- 項目2 ①基本的には、それぞれの保育室での活動を重視して保育活動を進めている。
 ②主として、コーナーを設定するなどして、園全体を保育の場として保育活動をしている。
- 項目3 ①特定の担任がクラスを担当し、保育活動はその担当を中心に進められる。
 ②保育体制は活動の内容によって、場や担当者を決めて全員で保育を進めている。
- 項目4 ①園長および保育主任が保育体制や保育の年間計画の原案を作成し、それに基づいて園の活動が進められている。
 ②保育担当者全員で協議し、保育体制や保育の年間計画を決定し、園の活動を進めている。

図2 「気になる子ども」を取り巻く保育の現場と保育体制

る方向が追求されて良いと思われる。この点に関しては、「保育体制・年間計画は保育担当者全員で協議」とする回答が74.3%に達していることから見て、園全体を保育活動の場とした「保育空間の構造化づくり」の環境が構築される下地が作られつつあると見ることができる。

(3) 「気になる子ども」のための保育方法

図3は保育者が見た「気になる子ども」すなわち、「まわりの人（保育者やクラスの子どもたち）の手を通して自分の要求を満たすことが上手にできない子ども」に対して、保育者はどのような保育の方法に力点をかけているかを見たものである。

これを見ると、50.0%を越えている項目は項目1(84.3%)、項目9(62.8%)、項目15(60.0%)、項目12(55.7%)の4項目があげられる。項目1は「他の子どもたちと一緒に保育している」という内容のものである。この項目内容は実際の保育の実態と対応しており、一見、特別な意味内容のない項目にとられがちであるが、保育者は現状の保育実態を押さえつつも「保育にあたって気になる子ども」の保育の場と保育体制作りにとって、「他の子どもたちと一緒に保育」の設定がまず何よりも大切であると考えているという点で重要である。拡散しがちな「気になる子ども」の行動を安定化させ、方向づける上でも子ども集団による保育の場づくりは大切なように思われる。項目1と同様、高い割合を示している項目と

して、項目9があげられる。項目9は「人との関係や子ども集団になじみ、行動できるように保育している」という内容のもので、62.8%の保育者がこの項目に回答している。このことは「気になる子ども」の入園当初の行動の特徴である「周りの人や物とのかかわりがうまくできない子ども」という課題性と対応しており、その整合性が認められる。

項目12は「自分で身のまわりのことができるように保育している」という内容のもので55.7%と高い割合で回答されており、保育にあたって力点がかけられている項目内容であることがわかる。「身の自立」というテーマは保育所での保育内容として、大切にしている指導項目であることから、ひとり「気になる子ども」のみの保育目標というよりも、園全体の共通した保育指導課題と見ることができよう。

以上のべた3つの指導項目はその子どもに直接関わる保育担当者の保育姿勢を反映しているが、その中でも、項目15の保育方法は園全体の保育体制にかかわる内容のものであり、興味深い。項目15は「この子どもを園全体で見えていくように保育者同士で心がけている」という内容のもので、回答した保育者の60.0%がこの項目を支持していることがわかる。「気になる子ども」の抱えている課題が保育の場の構造化と深くかかわっているとすれば、特定の保育者の課題にとどまらず、保育者全体の課題として共通に認識することが大切であるように思われ

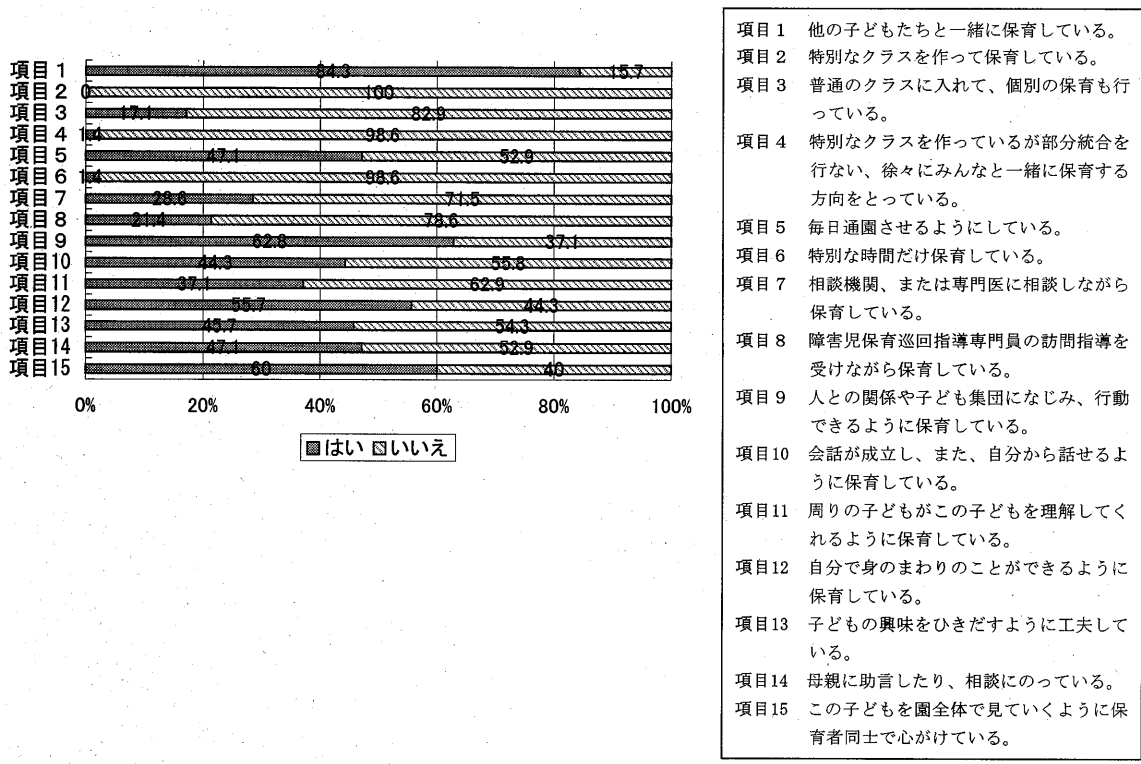


図3 「気になる子ども」のための保育方法

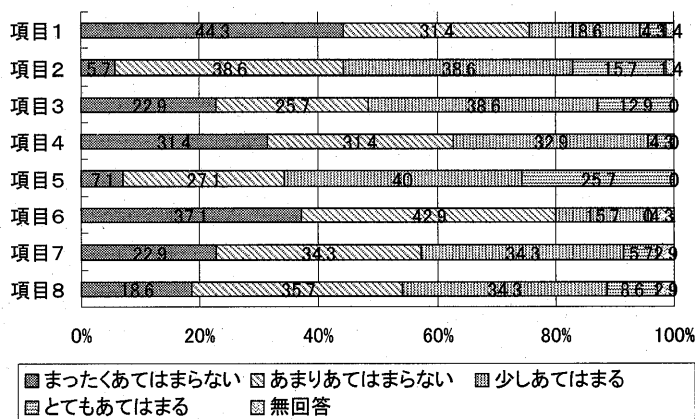
る。このことは、ひとりひとりの子どもに焦点をあわせた新しい「チーム保育」のあり方を追求していることを意味している。

その他の項目として、項目5、項目14、項目13、項目10が44.3%～47.1%の回答結果を得ており、保育にあたっての重点事項になっていることがわかる。これらの項目は「毎日通園させている (47.1%)」「母親に助言したり、相談にのっている (47.1%)」「子どもの興味を引き出すように工夫している (45.7%)」「会話が成立し、また、自分から話せるように保育している (44.3%)」などの内容のものである。項目5の「毎日通園させる」の項目内容は一見、平凡な内容に見えるが「気になる子ども」の持つ「行動リズムの安定化」という点では保育時間の問題以上に大切な保育事項のように思われる。この項目は「積極的に保育所に来たくなるような保育園の風土」を作るにはどのようにしたら良いかといった視点からの保育者の工夫と努力が深く関係している。項目13は「子どもの興味を引き出すように工夫している」という項目で、個に配慮した視点が内包されており評価される。項目10は「人とのかわり行動の育成を視野に入れた保育」という点で項目9「人との関係や子ども集団になじむ」と言う内容と共通した保育内容のものであり、「気になる子ども」の持つ課題と対応している。項目14「母親の相談・助言」は子どもに対する直接的アプローチのものではないが、保育者はこの側面からのアプローチも視野に入れていることがわかる。母子臨床の立場からすれば、子どもの発達基盤作りの主要な役割を担う「保護者」に対する適切な対応は「気になる子ども」に対する保育効果を高める上でも大切なように思われる。

(4) 「気になる子ども」が周りの子どもに与える影響

図4は「気になる子ども」の存在が周りの子どもにどのような影響を与えているかを保育者の目を通して捉えた結果を見たものである。

各項目のうち、プラスの内容の項目(項目2, 5, 8)に対する回答結果を見てみると、「とても当てはまる」「少し当てはまる」の回答で50.0%を越えた項目は、項目5 (25.7%+40.0%)、項目2 (15.7%+38.6%)、の2項目である。これらの項目は、項目8を含めていずれもまわりの子どもにプラスの影響を与えていると見ているもので、保育集団にいる「気になる子ども」の存在を肯定的に受けとめている保育者の評価的姿勢が認められる。それでは具体的にどのような項目内容のものかを見てみよう。もっとも肯定的割合の高い回答は項目5で保育者の65.7%がこの項目を支持している。その内容は「いたわり、思いやり、助け合う心が育つ」というもので、周りの子ども達の他者意識の形成にとって「気になる子ども」はひとつのきっかけを与えてくれると判断していることがわかる。保育者がこのような理解の姿勢を持っているということは、周りの子どもと「気になる子ども」との良好なマッチングの機会を保育活動の流れの中で意識していることを意味しており、保育活動の展開に期待できるものが大きい。このことは項目2の回答結果でも裏づけられる。項目2は「お互いに助け合い、集団としてのまとまりができる」という内容で54.3%の保育者がこの項目を支持している。割合はあまり大きくないが直接、保育を担当している保育者の振り返りの中での評価と考えると、そこには保育の実際にその取組の方向性が内包されていると考えられる。項目8は「この子どもから学びとるものが多く、周りの子どもの生活経験がひろがる」という内容であるが、回答結果は42.9%にとどまっ



- 項目1 身についた生活習慣がくずれる。
- 項目2 お互いに助け合い、集団としてのまとまりができる。
- 項目3 保育の流れが妨げられ、まわりの子どもが課題や遊びに集中できなくなる。
- 項目4 この子どものまねをして好ましくない行動をする。
- 項目5 いたわり、思いやり、助け合う心が育つ。
- 項目6 この子どもの世話をやきすぎ、自分のことがおろそかになる。
- 項目7 保育担当者がこの子どもに手をとられるため、まわりの子どもに不満が生じる。
- 項目8 この子どもから学びとるものが多く、まわりの子どもの生活経験がひろがる。

図4 「気になる子ども」が周りの子どもに与える影響

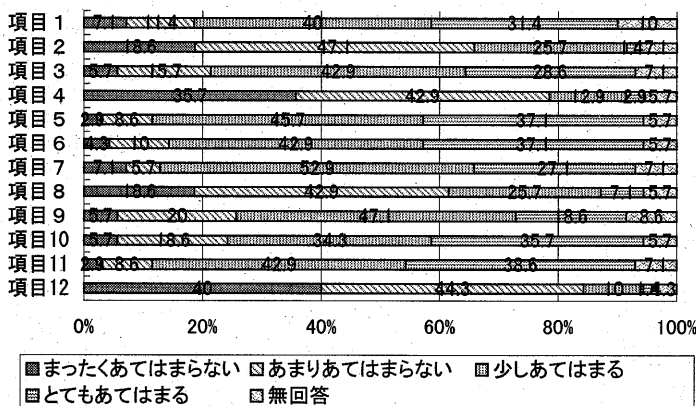
ておりその萌芽は認められるがその広がりには予測できない。

これらの項目に対して、項目1、項目3、項目4、項目6、項目7はいずれも、まわりの子どもにマイナスの影響を与えると見る項目であるが、これらの項目に対して「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」と打ち消しの回答をした保育者は項目1では75.7%、項目3では48.6%、項目4では62.8%、項目6では80.0%、項目7では57.2%と、項目3を除いていずれも50%を越えており、これらの項目内容はあてはまらないと回答している。このことからさらに、保育者は保育集団にいる「気になる子ども」の存在をマイナス的な評価意識で捉えていないことがわかる。つまり、項目6のように「この子どもの世話をやきすぎ、自分のことをおろそかになる」ということもなく、また、項目1のように「身についた生活習慣がくずれる」ということも大きな問題ではないことを指摘している。そしてまた、項目4のように「この子のまねをして好ましくない行動をする」ということも大きな問題ではないという評価意識の回答が優位な傾向にあることがわかる。

保育の場にいる「気になる子ども」の存在は保育者の目を通して全体的に見ると、肯定的視点から捉えられていると判断してよいように思われる。「気になる子ども」の行動上の問題の多様性にもかかわらず、保育者が保育集団における「気になる子ども」を肯定的に捉えていることは保育者の受容的世界の一端を示してことをも意味していると見ることもできよう。

(5) 「気になる子ども」に与える「みんな一緒に保育」の影響

図5は「気になる子ども」に与える「みんな一緒に保育」の影響について回答結果を図示したものである。設問は12項目から構成されている。項目1、3、5、6、7、9、10、11はいずれもプラスの影響について記述されている。これらの項目に対する回答を見てみると、項目5が最も高い割合を示しており、82.8%（とてもあてはまる37.1%、少しあてはまる45.7%）の保育者がこの項目を支持していることがわかる。この傾向は他の項目でも同様で、項目11（81.5%）、項目6（80.0%）、項目7（80.0%）項目3（71.5%）、項目1（71.4%）項目10（70.0%）はいずれも高い割合を占めている。最も低い割合の項目9「以前より行動が活発になる」においても、65.7%の保育者がこの項目を支持している。最も高い回答率を得た項目5は「まわりの子どもから学びとり、生活経験がひろがる」という内容のもので、まわりの子どもが「気になる子ども」の発達のモデルになっているという見方を保育者はしていることがわかる。実際、関連する他の項目を見ると明らかのように、「まわりの子どもから刺激を受け、行動を模倣し、発達が促進される（項目1）」、「みんなと遊べるようになり、友達関係が広がる（項目3）」、「好きなお友達ができる（項目11）」などがいずれも高い割合になっていることから見て、「みんな一緒に保育の場」の中での他の子ども達の出会いは「保育にあたって気になる子ども」にとって社会性の発達にとって大きな刺激素材になっていることがわかる。この



- 項目1 まわりの子どもから刺激を受け、行動を模倣し、発達が促進される。
- 項目2 適切な指導がなされないため取り残されることが多い。
- 項目3 みんなと遊べるようになり、友達関係が広がる。
- 項目4 仲間はずれにされて、ひとりであることが多くなる。
- 項目5 まわりの子どもから学びとり、生活経験がひろがる。
- 項目6 生活習慣の自立が促進される。
- 項目7 指導にしたがって集団行動ができるようになる。
- 項目8 集団行動ができず、まわりの子どもに強制されたり、叱られたりすることが多いため、かんしゃくを起こしたり、あまえることが多くなる。
- 項目9 以前よりも行動が活発になる。
- 項目10 幼稚園・保育所に積極的に来るようになる。
- 項目11 好きなお友達ができる。
- 項目12 まわりの子どもが世話をやきすぎ、自立できない。

図5 「気になる子ども」へのさまざまな子どもと一緒に保育の影響

効果はさらに、「生活習慣の自立が促進される(項目6)」や「指導にしたがって集団行動ができるようになる(項目7)」にまで発展的に波及している。何よりも興味深いのは「幼稚園・保育所に積極的に来るようになる(項目10)」という項目内容に回答率の高さが反映しているように、「幼稚園・保育所の場」に向かう気持を「気になる子ども達」に動機づけさせる力を「みんな一緒に保育の取組」が生み出していることにある。このことを裏づけるものとして、もう一方の対の逆転項目群の回答結果があげられる。

逆転項目群は項目2, 4, 8, 12の4項目から構成されている。これらの項目群はいずれも「気になる子ども」に対するマイナスの影響を指摘する内容項目であるが、図5を見ると、これらの項目に対して、「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」とする回答の割合が大きく、「みんなと一緒に保育」が「気になる子ども」に対してマイナスの影響を与えていないと保育者の多くは捉えていることが明らかにされている。項目12「周りの子どもが世話をやきすぎ、自立できない(あてはまらないとする回答40.0%+44.3%)」、項目4「仲間はずれにされて、一人であることが多くなる(あてはまらないとする回答35.7%+42.9%)」、項目8「集団行動ができず、まわりの子どもに強制されたり、叱られたりすることが多いため、かんしゃくを起こしたり、甘えることが多くなる(あてはまらないとする回答18.6%+42.9%)」などの項目に対する回答は「そのような周りの子どもとの交わりのずれ」は問題として発生していないとする保育者の評価的反応で占められている。また、項目2のように「指導の流れに乗り遅れる」といった問題も65.7%が「そのようなことはない」と回答している。

逆転項目の結果も合わせて、図5の「気になる子ども」に対するみんな一緒に保育の影響は、総体的に見て「気になる子ども」にとってプラスの影響を与えていると見

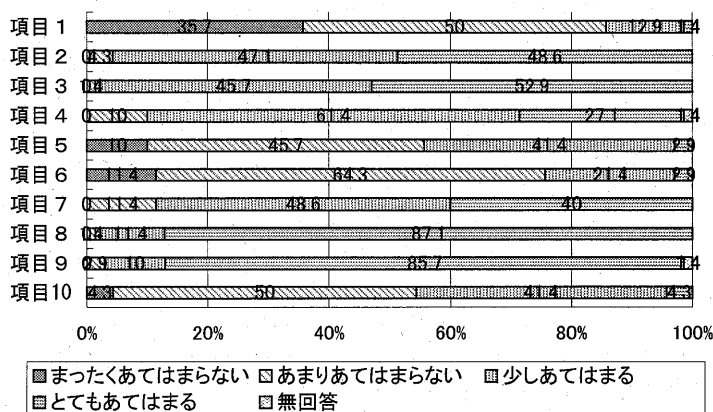
ることができる。これらの調査結果に反映する保育活動の様子は、少なからず、保育担当者の持つパーソナリティ特性とも関係しているものように思われる。

IV. へき地保育所のこれからの課題—さらなる受容的保育環境の広がりのために—

(1) これからの保育に求められる保育者像

図6は次のような設問の回答結果をまとめたものである。「これからの保育の場ではさまざまな個性や特徴のある保育担当者が求められていると考えられます。それではどのような保育担当者の特性が大切にされるべきでしょうか。」

図6の各特性項目はランダムになっているが、エゴグラム(東大医学部心療内科編著, 1995)を参考にして設問構成をしている。項目1と項目5の特性項目はCP尺度項目群、項目3と項目8の特性項目はNP尺度項目群、項目7と項目9の特性項目はA尺度項目群、項目2と項目10の特性項目はFC尺度項目群、項目4と項目6の特性項目はAC尺度項目群に属している。CP尺度項目群(1, 5)の回答の内訳を見てみると、特性項目1では「とてもあてはまる」1.4%、「少しあてはまる」12.9%の内訳になっている。この結果は項目5ではやや、その傾向を異にしている。特性項目5の内訳を見ると、「とてもあてはまる」2.9%と低い割合を示しており、特性項目1との対応性が認められるが「少しあてはまる」の回答結果が41.4%となっており、項目1の12.9%より高い割合になっている。CP尺度項目群はエゴグラムパターン(親、以下Pと略す)、大人(Adult, 以下Aと略す)、子ども(Child, 以下Cと略す)の3つの自我状態のうち、親(P)の自我状態に属している。Pはさらに、CP(Critical Parent)とNP(Nurturing Parent)に分けられている。CPは批判



- 項目1 物事に批判的である。
- 項目2 好奇心が強い。
- 項目3 困っている人を見ると手助けする。
- 項目4 不快なことでもがまんする。
- 項目5 相手の不正や失敗に厳しい。
- 項目6 遠慮がちであること。
- 項目7 何事も事実にもとづいて判断する。
- 項目8 人の長所に気づきほめる。
- 項目9 わかりやすく物事を表現する。
- 項目10 冗談を言ったり軽口をたたいたりする。

図6 これからの保育に求められる保育担当者の特性

的なPと言われ、理想、良心、責任、批判などの価値判断や倫理観など、父親的な厳しい部分を主としている。これに対して、NPは養育的Pと言われ、共感、思いやり、保護、受容など、子どもの成長を促すような母親的な部分を主としている。今回の調査では、CPの特性は特性項目1「物事に批判的である」、特性項目5「相手の不正や失敗に厳しい」の2つの尺度項目群によって構成されているが、両特性項目とも「とてもあてはまる」とする回答は1.4%（項目1）、2.9%（項目5）と極めて低い割合になっており、「これからの保育に求められる保育者像」を構成する要素としてはあまり強く意識されていないことがわかる。ただし、「少しあてはまる」の回答結果の内訳では、12.9%（特性項目1）～41.4%（特性項目5）と回答に幅があり、必ずしも、この項目の持つ特性が必要ではないとしているわけではないことがわかる。これに対して、親（P）の自我状態の一方の極であるNPについての回答結果は極めて、はっきりした形で提示されている。NPの特性は特性項目3と8で捉えられるが、特性項目3「困っている人を見ると手助けする」の割合は52.9%の保育者が「とてもあてはまる」と回答しており、「少しあてはまる」の回答45.7%を加えると98.6%の保育者がこの特性を支持している。NP特性のもう一方の対項目である特性項目8においてもこの傾向が支持されている。特性項目8は「人の長所に気づきほめる」という内容であるが、この特性項目に対する回答結果は「とてもあてはまる」87.1%、「少しあてはまる」11.4%と高い割合を示しており、全体で98.5%がこの結果で占められている。この結果から見て、これからの保育に求められる保育者像の主要な要因としてこのNP特性が保育者の意識にあることがわかる。それでは、他の尺度群はどのような結果になっているであろうか。A尺度群から順次、見ていくことにしよう。

A尺度群は項目3つの主要な自我状態のうち、大人の自我状態を捉える特性項目（項目7、9）で構成されている。この特性は端的に表現すれば、事実に基づいて物事を判断しようとする自我状態の部分で占められているものである。A尺度項目群に対する保育者の回答結果を見てみると、特性項目7「何事も事実に基づいて判断する」の項目については、40.0%（とてもあてはまる）、48.6%（少しあてはまる）とこの特性を支持する回答が高い割合になっており、全体の88.6%の保育者がこの特性を重視している。特性項目9「わかりやすく物事を表現する」の結果ではさらに強い傾向が認められており、85.7%の保育者がこの特性を「とてもあてはまる」と回答している。

最後に、C（Child）尺度群の結果について見てみよう。C尺度群はAC（Adapted Child）とFC（Free Child）

から構成されている。ACは順応したCを意味しており、FCの本能的な部分と対照的に人生の早い時期に周囲の人たち（特に、母親）の愛情を失わないために、その人なりに身につけた処世術を持ち合わせていると言われている。これに対して、FCは自由なCと言われ、親の影響をまったく受けていない、生まれながらの部分である。まず、FCから見てみよう。FCは特性項目2と10から構成されている。特性項目2は「好奇心が強い」という内容であるが、保育者の48.6%の保育者が「とてもあてはまる」と回答し、47.1%の保育者が「少しあてはまる」と回答している。この結果を見ると、保育者の95.7%がFCの特性を認めている。これに対して、特性項目10「冗談を言ったり軽口をたたいたりする」に対して、保育者の4.3%のみが「とてもあてはまる」と回答しており、「少しあてはまる」の回答結果41.4%を加えても45.7%にとどまっている。結果から明らかなように、FCの場合、項目の内容によって回答の結果に差が出ている。つまり、回答者は「これからの保育に求められている保育者像」の中に「好奇心が強いこと」による行動的な積極性を認めつつも、「冗談を言ったり軽口をたたいたりする」という対人関係におけるこのような行動的な立ち振る舞いを認めていないことがこの結果から推測することができる。FCの特性項目によって回答に違いが出ている問題は次に述べるACにおいても同様に指摘される。

すでに述べたように、ACは特性項目4と6から構成されている。結果を見ると、特性項目4「不快なことでもがまんする」では「とてもあてはまる」27.1%、「少しあてはまる」61.4%と保育者の多くはこの特性項目を支持しているのがわかる。しかし、特性項目6「遠慮がちであること」では「とてもあてはまる」2.9%と極めて低く、「すこしあてはまる」の回答結果21.4%を見てもこの特性項目を保育者が支持していない結果となっている。つまり、保育者は「不快なことでもがまんすることの大切さを認めつつも、そのことが「遠慮がちであること」を支持しているものではないと見るのが妥当のように思われる。

それではこの5つの特性項目群から見た保育者像はどのようなものであろうか。エゴグラムの枠組を通して特性項目群を全体的に見てみると、NPとAがプロフィール中央部で突出し、左サイドにCP、右サイドにFC、ACがやや低い割合で位置した形のプロフィールが描かれる。このことから「これからの保育に求められている保育者像」には父親的特性を内包したCP特性が極めて低く抑えられていることがわかる。また、FC（自由な子ども）特性やAC（従順な子ども）特性も傾向が明確でない。これに対して、NP特性とA特性がいずれも尺度間の整合性が高い形で高い割合になっていることがわ

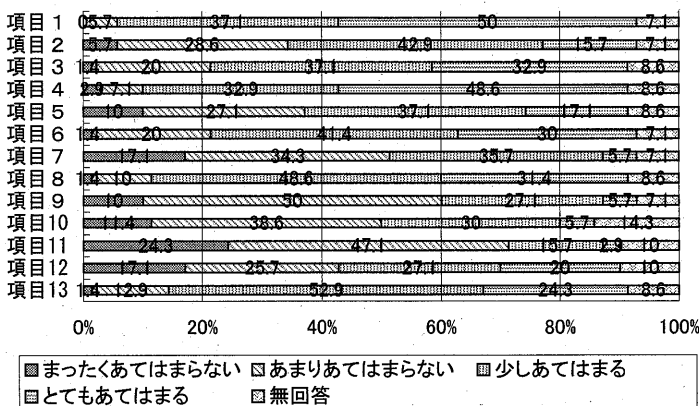
かる。これらの結果を総合的に見ると、母親的特性を内包したNP特性と大人の自我状態A特性を頂点にした台形型のプロフィールと見ることができる。つまり、「気になる子ども達」と保育活動を共にしているへき地保育所の保育者達の描く「これからの保育に求められる保育者像」はNPとAの特性を中核にした台形型であると見ることができる。へき地保育所の保育者の多くは極めて受容的かつ明るく健康的で自己主張ができる「自己肯定的タイプ」の特性を未来の保育者に求めているように思われる。また、NPとAの特性が生み出す子どもの育ちを促す暖かさとかかわり行動の安定性を内包している自我状態をもつ保育者の世界をへき地保育所の保育者は志向している。「気になる子ども達」を包みきれぬ保育者の世界はひとり、「気になる子ども」だけにとどまらず、保育支援を必要としている全ての子どもにとっても必要とされているもののように思われる。

(2) 「気になる子ども」を担当している保育者の意識と保育者支援の課題

図7は「気になる子ども」を担当しているへき地保育所の保育者を対象にして「これらの子どもたちを担当して感じていること」を調査項目として設定し、回答を求めたものである。これを見ると、保育者が「気になる子ども」との保育の取組の中で感じていることが明らかになり、保育者支援の手がかりが見えてくるものと思われる。設問項目はプラスの項目内容のもの（項目1, 3,

4, 6, 8, 10, 13) 7項目とマイナスの項目内容のもの（項目2, 5, 7, 9, 11, 12) 6項目の合計13項目で構成されている。

プラスの項目群を見ると、項目10「保護者から感謝されている（とてもあてはまる5.7%、少しあてはまる30.0%）」を除いて、その他の項目はいずれも、「あてはまる」とする回答の割合が高く出ており、「気になる子ども」に対する保育の取組の意義を強く感じている様子がわかる。項目別に見てみると、項目1「いろいろな子どもについて勉強することができてよい」の割合が最も高く87.1%（50.0%+37.1%）の保育者がこの項目を支持している。このことは、項目8、項目6においても同様な傾向にある。項目8は「発達の筋道について、あらためて勉強することができる（31.4%+48.6%）」というもので、「気になる子ども」の保育体験が保育者の保育の資質をあげる原動因になっていることを示している。項目6も項目8と同様に「子どもを見る目が育ち、保育の仕方がこまやかになる（30.0%+41.4%）」という内容で、この2つの項目はどちらかといえば保育者自身にとってプラスの面を指摘しているものである。これに対して、項目4は「成長する子どもの生きる力に感動や喜びを感じる（48.6%+32.9%）」という内容であるが、その子どもそのものの発達の変化に強く、意識を寄せており、81.5%の保育者がこの項目内容を支持している。さらに、この子どもを取り巻く「子ども集団」の発達の変化を示す項目3が70.0%（32.9%+37.1%）、項目13



- 項目1 いろいろな子どもについて、勉強することができてよい。
- 項目2 専門的な知識がないのでいつも不安である。
- 項目3 助け合う子どもの集団が育ってくる。
- 項目4 成長する子どもの生きる力に感動や喜びを感じる。
- 項目5 他の子どもとくらべて、数倍の注意や労力があるので疲れが大きい。
- 項目6 子どもを見る目が育ち、保育の仕方がこまやかになる。
- 項目7 この子どもに手をとられ、他の子どもに対する指導が十分にできない。
- 項目8 発達の筋道について、あらためて勉強することができる。
- 項目9 記録の整理、保護者との連絡などに時間をとられることが多い。
- 項目10 保護者から感謝されている。
- 項目11 他の子どもの保護者の理解が得られず苦勞する。
- 項目12 保護者にこの子どもに対する保育の取り組みを理解してもらうことにむずかしさを感じる。
- 項目13 お互いに学びあう保育者の集団が育ってくる。

図7 「気になる子ども」を担当して感じる事

が77.2% (24.3%+52.9%)と高い割合を示していることから見て、へき地保育所の保育者の「気になる子ども」を包む保育姿勢の幅の広さが認められる。項目3「助け合う子どもの集団が育ってくる」、項目13「お互いに、学びあう保育者の集団が育ってくる」は「気になる子ども」への保育的アプローチがそれを取り巻く子ども集団、保育者集団が重層的かつ連鎖的に接続しており保育活動の基点に「気になる子ども」の存在が定位するプロセスにあることがわかる。

それでは、「気になる子ども」を担当して、マイナス的に感じているものはどのようなものであろうか。マイナスの内容の項目に対する回答の割合は、18.6% (項目11) ~58.6% (項目2) の範囲にある。最もマイナス度の高い項目内容は項目2「専門的知識がないのでいつも不安である」という内容のもので、保育者の回答の内訳は「とてもあてはまる」15.7%、「少しあてはまる」42.9%となっている。回答傾向の度合いは強いものではないが、研修の機会や情報の入手の困難さの問題はへき地保育所の保育者の抱えている共通した課題であろう。さらに、特別な援助を必要とする子どもの保育支援の問題はひとり、担当の保育者だけで対応できる問題の域を超える場合があることが十分、予想される。その他のマイナス項目5, 12, 7は高い割合ではないが、保育者の側に立てば無視できない問題のように思われる。項目5「他の子どもとくらべて、数倍の注意や労力があるので疲れが大きい (17.1%+37.1%)」、項目12「保護者にこの子どもに対する保育の取組を理解してもらうことにむずかしさを感じる (20.0%+27.1%)」、項目7「この子どもに手をとられ、他の子どもに対する指導が十分にできない (5.7%+35.7%)」などの項目内容は特に、へき地の保育所の保育体制の課題とも密接に関係しており、担当者ひとりにかかる負担の問題は専門的支援とあわせて検討する必要がある。その他のマイナス項目9「記録・連絡に時間がとられる」、項目11「他の子どもの理解が得られず苦勞する」などは回答の割合が小さい。

総体的に見て、プラスの項目に対する保育者の回答の割合が項目10を除いて、70.0% (項目3) ~87.1% (項目1) という高い割合にあるのに対して、マイナス項目は18.6% (項目11) ~58.6% (項目2) と圧倒的にプラス項目を支持する保育者の回答が優位であることは「気になる子ども」の受け入れに困難さを感じつつも、保育者自身がこれらの課題を自らの課題として捉え、保育を進めていこうとする、へき地保育所の保育者の前向きな姿勢として認めることができよう。

あとがき

本調査研究を進めるにあたって、北海道内のへき地保育所の全面的な協力を得ました。また、本稿のまとめにあたって、北星学園大学の後藤恵美子教授および北海道教育大学大学院学校臨床心理学講座の植木克美助教授の助言指導を受けました。ここに付記して謝意を表します。

なお、本調査研究は北海道教育大学へき地教育研究センターから研究費の助成を受けて進めています。

引用文献・参考文献

1. 北海道社会福祉協議会 (第19号調査委員会) (1976) : 障害をもつ幼児の保育の実態と指導方法に関する基礎的研究 (中間報告).
2. 後藤 守 (1979) : 北海道における障害児保育の動向と課題 (I). 北海道教育大学僻地教育研究, 第26巻第1号, 57-67.
3. 後藤 守 (1981) : 北海道における障害児保育の動向と課題 (II). 北海道教育大学僻地教育研究, 第28巻第1号, 77-88.
4. 後藤 守・小笠原詠子 (1985(a)) : 統合保育の動向. 北海道教育大学紀要 (第1部C), 第35巻第2号, 101-114.
5. 後藤 守・小笠原詠子 (1985(b)) : 北海道郡部における障害児保育の動向と課題. 北海道教育大学僻地教育研究, 第39巻第1号, 101-111.
6. 後藤 守・小笠原詠子・井上栄子 (1985(c)) : 統合保育の動向 (II). 北海道教育大学紀要 (第1部C), 第36巻第1号, 201-211.
7. 後藤 守・小笠原詠子・小笠原 仁 (1990) : 北海道郡部における障害児保育の動向と課題 (第2報). 北海道教育大学僻地教育研究, 第44号, 31-41.
8. 小笠原詠子・後藤 守 (1991(a)) : 北海道における統合保育の動向に関する研究. 北海道大学教育学部紀要, 55号, 47-55.
9. 後藤 守・小笠原詠子・小笠原 仁・金澤克美 (1991(b)) : 精神遅滞児の事例における統合保育の動向と課題. 北海道教育大学紀要 (第1部C), 第41巻第2号, 79-87.
10. 後藤 守・小笠原詠子・小笠原 仁・金澤克美 (1991(c)) : 障害児保育に関する地域的特性に関する研究—北海道郡部の保育所の事例を中心として—. 北海道教育大学僻地教育研究, 第45号, 15-26.
11. 小笠原詠子・後藤 守・金澤克美 (1993) : 障害児保育における地域的特性に関する研究 (II)—北海道郡部の幼稚園の事例を中心として—. 北海道教育大学

- 僻地教育研究, 第47号, 43-49.
12. 後藤恵美子・金澤克美・小笠原詠子・三浦 哲・後藤 守 (1995(a)) : 障害児保育における地域的特性に関する研究—北海道郡部保育所の追跡調査の結果を中心として—. 北海道教育大学僻地教育研究, 第49号, 7-16
 13. 後藤 守 (1995(b)) : 北海道の障害児保育20年. 北海道乳幼児療育研究, 第8号, 37-45.
 14. 後藤恵美子 (1995(c)) : 札幌市における障害児保育巡回指導. 北海道乳幼児療育研究, 第8号, 69-73.
 15. 後藤恵美子 (1995(d)) : 障害をもつ子どもをとりまく保育環境に関する検討—保育所・幼稚園の保育形態および方法に関する調査結果の分析を通して—. 北海道心理学研究, 第18号, 71-82.
 16. 後藤 守・後藤恵美子・金澤克美 (1995(e)) : これからの障害児の保育と教育に関する保育者の意識 (I). 保育所における園長と保母の意識に関する調査を通して. 北海道教育大学紀要 (第1部C), 第45巻第2号, 173-177.
 17. 後藤 守・後藤恵美子・金澤克美 (1996) : これからの障害児の保育と教育に関する保育者の意識 (II) —幼稚園における園長と教師の意識に関する調査を通して—. 北海道教育大学紀要 (第1部C), 第46巻第2号, 95-104.
 18. 後藤 守・後藤恵美子・金澤克美 (1998(a)) : へき地保育所における障害児保育. 北海道教育大学僻地教育研究, 第52号, 35-42.
 19. 金澤克美・後藤恵美子・後藤 守 (1998(b)) : 障害児保育実施へき地保育所の保育者の描く子ども像. 北海道教育大学僻地教育研究, 第52号, 143-148.
 20. 高久宏一・後藤恵美子・後藤 守 (1999) : へき地保育所の保育者が求める保育者像に関する臨床心理学的アプローチ. 北海道教育大学僻地教育研究, 第53号, 133-138.
 21. 後藤 守・後藤恵美子・金澤克美・高久宏一 (2001) : これからの保育に求められる保育者像に関する臨床心理学的研究—エゴグラム・パターンの分析を通して—. 北海道教育大学紀要, 第51巻第2号, 53-61.
 22. 後藤広太郎・後藤恵美子・植木克美・高橋敏憲・後藤 守 (2004) : 保育所・幼稚園訪問方式による保育臨床支援の試み (I) —「気になる子どもたち」に対する保育現場の受容的風土に関する検討—. 北海道教育大学教育実践総合センター紀要, 第5号, 193-202.
 23. 植木克美・後藤広太郎・後藤恵美子・後藤 守 (2004) : 「保育にあたって気になる子ども」の様相と保育臨床支援 (I) —保育者から見た「気になる子ども」の内包的意味世界—. 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集.
 24. 後藤恵美子・後藤広太郎・植木克美・後藤 守 (2004) : 「保育にあたって気になる子ども」の様相と保育臨床支援 (II) —保育者が捉えた“さまざまな子どもと一緒の保育環境”について—. 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集.
 25. 後藤 守・後藤広太郎・後藤恵美子・植木克美 (2004) : 「保育にあたって気になる子ども」の様相と保育臨床支援 (III) —保育担当者の描くこれからの保育に求められる保育者像—. 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集
 26. 東京大学医学部心療内科編著 (1995) : 新版エゴグラム・パターン—TEG 第2版による性格分析—. 金子書房.
 27. 後藤恵美子・後藤広太郎 (2003) : 第8章とくに配慮を必要とする子どもの保育の方法. 「実践への保育学 (関口はつ江・大田光洋編)」同文書院, 160-175.